

平成 19 年 5 月 21 日

モーガン邸主屋の焼損状況実見の所見

日本建築学会関東支部歴史意匠専門委員会 委員
横浜国立大学大学院工学研究院 准教授 大野敏

主屋の焼損状況を実見した概要は下記の通りである。なお室名は『湘南の名建築 モーガン邸はこうして残った』（モーガン邸を守る会 2007 年 2 月）の 1 階平面図にならった。

基礎

コンクリート布基礎は特に損傷はないようである。

土台・床組

コンクリート布基礎上に木製土台を廻らしている。また、要所に独立基礎を設けて束を立て床組の大引きを支えている。床の焼損は少なく、焼損が認められるのはサンポーチ南際、リビング西端の一部、階段脇の廊下、使用人室で、床が抜け落ちているのは使用人室のみで、他の箇所は比較的焼損程度は低い。なお、寝室 1 とゲストルームは焼損部材（屋根材片や内装材片）が堆積しており、状況は未確認であるが、床を踏んだ感触では大きな被害はなさそうである。キッチンもシート張りのため床組を直接確認できないが、比較的健全のようである。玄関・浴室・トイレの床タイルは健全である。サンルームは寄せ木風張り板が熱で反り返っている物が多い。

軸組

土台の上に柱を立て、柱間に間柱を配す。柱は各室隅部および開口部両脇などに配す。柱は、使用人室廊下北面の柱列と 2 階通し柱の一部を除き転倒などは認められないが、屋内に露出する柱は焼損が大きく、鱗状の炭化が目立つ。また、大壁に覆われている部分の柱・間柱であっても、天井見え隠れ部分からの炎の侵入によりほとんどが損傷を受けていると見られる。なお、洗濯室にのみ土壁が使われていたが、柱の土壁接触面は全く炭化を生じておらず洗濯室西面壁（土壁）は健全であり、土壁の耐火性能の高さがわかる。外周部の柱は原則として側桁を廻らし隅部は火打をとる。サンポーチ正面は側桁および丸太の化粧桁を側桁よりも低く配し、使用人室および洗濯室は 2 階があるので通し柱を胴指しで繋ぎ、2 階の側桁を廻らせる。室内は側桁とほぼ同高で梁を架ける。側桁・火打ち・梁・胴指しは、使用人室・洗濯室部分の一部を除き落下や移動などは認められないが、全体的に焼損が大きく鱗状の炭化が目立つ。また、側桁組手や側桁と梁との組手などは、仕口の損壊が目立つが、羽子板ボルトなどの金具は変色しているものの機能を維持している。

小屋組・屋根下地

小屋組は、現在側廻りの隅部を中心にその形式を残しているにすぎず、一部は梁上に横

たわっている。また、野地板・野垂木はほとんど小断片となって落下してしまった。

梁上に残る小屋束や母屋束を見ると、柱や梁類と同様に鱗状の炭化が大きい。

壁

外壁の大壁モルタルは、サンポーチ上の小壁や、使用人室および洗濯室上方の壁を除きほぼ原形をとどめている。ただし大壁部の柱や間柱の焼損が大きいのに関連して、大壁下地の斜め木摺は焼損が大きい。

室内側の大壁はおおむね漆喰仕上げで、天井際に削り形を施す。漆喰塗り大壁部分は焼け残っているものが多く一定の耐火性能が認められるが、先述のように天井見え隠れは大壁で覆わないためここから炎が侵入して壁下地を焼損し、壁が崩落してしまった箇所が寝室1・2の一部に見られる。また、2箇所ある床の間の板壁は焼損が大きく化粧部分の残存率は少ない。

キッチン・トイレ・浴室の壁面タイルは剥落が目立つ。

天井

天井は玄関ポーチを除きほぼ失われているが、壁との接触面の漆喰削り形はサンルーム・ゲストルーム・寝室1および2において多く残存し、サンルームでは中心飾り部分も残存する。サンルームは天井野淵も原形を留めているが、焼損程度は大きい。

サンポーチの化粧屋根裏天井は、垂木掛が焼損で落下したのに伴い、垂木尻が落下している。化粧垂木の焼損も大きく、鱗状の炭化が目立つ。

造作

ダイニングおよびリビングの長押は焼損が多く、床の間の落とし掛けも同様である。サンルームの削り形付き押縁もほぼ完存しているが焼損程度は大きい。

2階への階段はほとんど焼け落ちてしまい。東側に階段桁の一部と踏み板を留めるに過ぎない。トップライトの枠・ガラスは確認できなかった。

建具

玄関出入り口の扉は表面のペンキが剥離しているが健全である。それ以外の建具は、引き手金具を除いて焼損が大きい。ただし、外周部の当初建具の多くは、焼損を免れた増築棟屋内に保管されていたため無事である。

屋根

瓦はすべて取り除き、再用可能と思われる物が選別され別途保管されている。その分量は全体の2割くらいか。また、サンポーチ化粧軒上は銅板瓦棒葺きの庇屋根があらわれ、本来は庇屋根であったことが判明した。

設備

屋内配線は焼け、ガイシは健全だが外れている物が多い。スイッチ類は金属部分がよく残っている。寝室 2 の呼び鈴ブザーも残っている。天井裏の給水タンクや水道蛇口・シャワー・配管などの水廻りの金属部品はよく残っているが、衛生陶器は火災の熱で破裂したのか欠損が目立つ。また、暖房用のラジエータはそのまま残り、グリル金網も残る。

暖炉のマントルピースは人造石の枠部分に割れを生じ、正面のタイルが焼けただけのように見えるが、全体としてみると比較的健全である。

鉄筋コンクリート構造と思われる煙突 2 箇所は特に問題なさそうである。

全体として

全体としてみると、焼損は広範囲に及んでいるが、玄関部分は焼損を免れ内外ともほぼ原形を保っており、各室の外壁もほぼ原形を保っている。また、各室の床もほぼ原形を保っており、この部分は現状を活かした部分的な修復で対応可能と思われる。サンルームは比較的焼損程度が少なく、従前の雰囲気をよく伝えている。

軸組も基本構造は原形を留めているが、表面の炭化が大きい点をどう解決するか検討が必要である。すなわち、大壁部分は、炭化部分を削り落として飼い物する、あるいは樹脂で固めて大壁に復すことは可能であろう。ただし、焼損により材端部分のおさまりに不具合を生じているので、その部分への対応が必要である。間柱は部材断面が小さいため、基本的に再会は難しいであろう。化粧部分の軸組部材は、鱗状の炭化程度から見て原則は取り替えを考えるべきである。ただし、今回の火災を教訓として活かし焼損のひどい状況を記憶に留めるため、「焼損記録部屋」のような部屋の設置は検討すべきであろう。また、断面の大きな部材（丸太の化粧桁や側桁）は再会を検討すべきである。

小屋組は転用材が多いと聞く。束・母屋の焼損程度が大きく、野地の部材は細分化されてしまったので、思い切って全体を新材で補う必要があるだろう。

側廻りの建具は当初材が保管されていたのであるから、これを復元的に配置し、サンボーチの瓦棒銅板葺きの復原も検討するべきである。

なお、新材に取り替える場合、焼損しているとはいえ当初部材の残存度は大きいので、これを参考として材種・寸法・おさまりなど旧規を踏襲することを原則とすべきである。そして取り替えで不用となった当初部材は、できるだけ保管することに心がけたい。そうすればモーガン邸主屋の文化遺産的価値は継承できると考えられる。

なお、設備関係もできるだけ再利用して行くことが望ましいが、その場合展示（機能再現は困難）となってしまうので、実際のトイレや暖房器具・配線・スイッチなどの設置も併設することも検討対象となろう。その場合、今後どのような管理活用を行っていくのかの検討が必要であるし、しっかりした防災計画と設備充実にも務めることが望まれる。

モーガン邸の火災はまことに残念な事態であるが、これを契機にこの建物の存続意義をもう一度問い直し、「地域に開かれ市民が護り伝えていく文化遺産」としてその基本的条件を徹底的に議論し整備して欲しい。